

日本ベンチャー学会 会報

ISSN 2434-5970

新たな価値創出のために求められる、人間中心の関係づくり

株式会社浜野製作所代表取締役会長 浜野 慶一

国内の中小製造企業の減少の問題は深刻だ。筆者が代表を務める株式会社浜野製作所の所在地である東京都墨田区は、23区で二番目の中小製造企業の集積地であり高度経済成長期には9,703社が活動していた地域である。しかし現在は1,600社程度と最盛期の1/5程度に事業者数は減少し、また、区内工場の80%は従業員数が5人以下の小規模・零細・家族経営規模である。その殆どはサプライチェーンの4次・5次下請けの部品加工をしている。中には、0から1の開発領域を得意とし、価値創出に関わる高い技術やノウハウを持つ企業もあるが、一社依存・一業界依存で、「知る人が知る」存在のまま新たな取引先を開拓することなく、事業承継をせずに工場を廃業する場合も少なくない。こうした技術が失われることで、日本から新たなモノを生み出すための力が失われつつある。

浜野製作所もかつての取引社数は3-4社で顧客開拓の課題を抱えていた。しかし、産学官連携プロジェクトへの参加、スタートアップ支援、インターンシップの受け入れなど、これまでの「部品加工の受発注」とは異なる多様な関係性を築いてきた結果、20年前は2名で切り盛りしていたのが、現在では50名程が働く企業となり多種多様な業界業種の人々と繋がり仕事をしている。純粋にモノをつくるだけではない、モノづくり周辺の「コト」に取り組んだことが今につながってきたと言えるだろう。今回はそうした「コト」づくりの中でも、筆者が実行委員長として携わっているオープンファクトリー「スミファ」の例を通して、他社と連携しながら新しい事を始める際の関係性の在り方を考えたい。

スミファは2012年に墨田区の中小町工場が集まって第1回目が開催され、コロナ禍ではオンラインで実施しながら、今年で12回目を迎える。先に述べたように墨田区の中小製造業は5名以下の企業が非常に多い。営業は社長のみ、WebサイトやSNSなどで企業をPRする手段は増えたものの、実際にモノを見て

もらうための展示会には出展しづらい。こうした閉そく的な状況に対し、町工場の技術を現場で見ることができる仕掛けが必要だと考えた。こうして複数の工場を集めて墨田区のオープンファクトリーは始まった。

近年、オープンファクトリーは日本全国で取り組まれている。八王子・郡山・台東区・鰐江など開催地同士の交流も活発に行われており、新たな価値創出を中小企業自らが進めている。共有された各地の知見と筆者の経験も踏まえて、連携事業に取り組む際に必要となるだろう共通の要素が分かってきた。ポイントはいくつかあるが、最も重要な要素は「粹とヤボとお節介」であると考えている。「粹に計らい、ヤボな事は言わず、お節介に(互いに)世話を焼く」。下町流の表現ではあるが「相互尊重」という言葉では捉えきれない心意気をこの言葉に込めて。属性が異なる多数の人が集まって新しいコトを興そうとする際には、経験や立場の違いから様々な意見の相違が生まれる。慣れないコトを実施する際に共通して言えることだが、考えが相反する時には、他者の意見を受け入れる柔軟さが求められる。相手の立場を思いやりながら、プロジェクトの進行に一丸となって協力をしていく事が必要だ。

価値創出には多様なプレイヤーの連携が必要だと言われているが、それを実現する関係性を一朝一夕で築くことは難しい。ビジネスでつながる企業同士が「ゴールの達成」「利益」といった指針だけでなく、意識的に「粹とヤボとお節介」の文化を内包し、一人一人が個として互いを気遣いながら連携を深めていくことが、結果的に新しいものを生み出し、予測できない未来に対応できる持続的な価値創出を行うことにつながるのではないかだろうか。体系的にその仕組みをつくり上げることは難しいかもしれないが、長期的な時間軸で人間中心的な関係づくりの場を作っていくことが、これからより求められていくのではないかと考える。